

瀬祭書屋主人著

叢書  
日本

瀬祭書屋俳話

全

發兌 日本新聞社

本問文庫

文庫 14

D 120

80

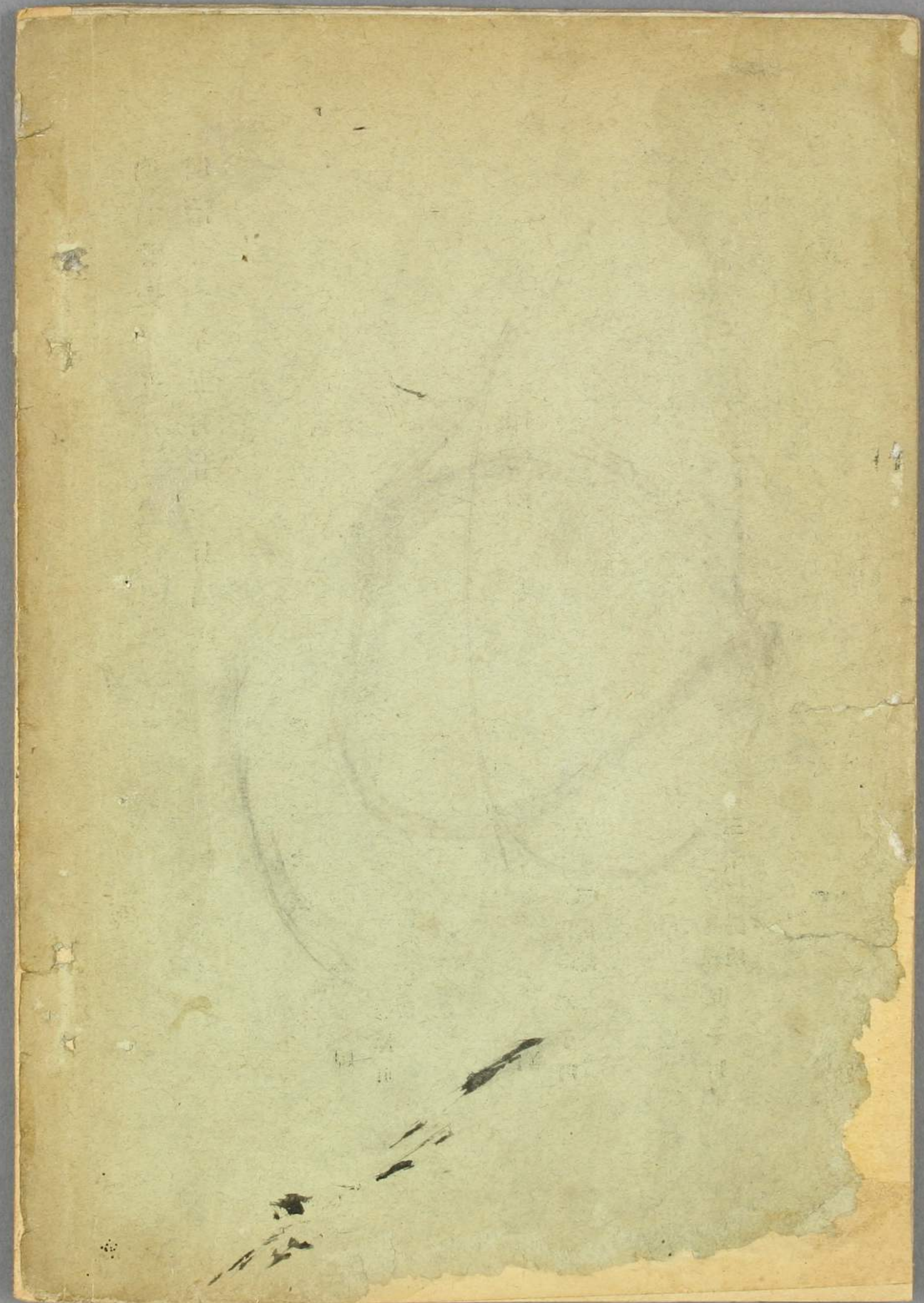
75

70

65

60





文庫14  
D120

### 懶祭書屋俳話小序

老子曰く言者は知らず知者は言はずと還初道人曰く山林の樂を談ずる者未だ必ずしも眞に山林の趣を得ずと政治を談ずる者政治を知らず宗教を談ずる者宗教を知らず英佛の法を説き獨露の學を講ずる者未だ必ずしも英佛獨露を知らず文學の書を著し哲理の説を爲すもの未だ必ずしも文學哲理を知らず知らざるを知らずとせず而して之を口に之を筆にし以て天下に公にす知者は之を見て其謬妄を笑ひ不知者は之を聞きて其博識に服す故に之を談ずる者愈多くして之を知る者愈少し余も亦俳諧を知らず而して妄りに俳諧を談ずるものなり曩に『日本』に載する所の俳話積んで三十餘篇に至る今之を輯めて一卷と爲さんとす乃ち前後錯綜せる者を轉置して稍々俳諧史、俳諧論、俳人俳句、俳書批評の順序を爲すといへども固と隨筆的の著作條理貫通せざることも多し況んや淺學寡聞にして未だ先輩の教を乞ふに違あらざれば誤解謬見亦應に少からざるべし知者若し之を讀まば郢正の勞を

賜へ若し夫れ俳諧を知らざる者に至りては知らずして妄りに説を爲す者の言に惑ふ莫れ

明治廿五年十月廿四日

懶祭書屋主人識

二

懶祭書屋俳話



懶祭書屋主人著

俳諧といふ名稱

俳諧といふ語は其道に入りたるもの、平生言ふ意義と一般の世人が學問的に解釋する意義と相異なるが如し。俳諧といふ語の始めて日本の書に見えたるは古今集中に俳諧歌とあるものこれなり。俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釋する人多く其意味に因りて俳諧連歌俳諧發句と云ふ名稱を生じ俗に又之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尚なる者ありて必ずしも滑稽の意を含まず。ここに於て俳諧なる語は上代と異なりたる通俗の言語又は文法を用ひしものを指して云ふの意義と變したるが如し。然れども普通に俳諧社會の人が單に俳諧とのみ稱する時は俳諧連歌の意にて云ふものなり。而してこれと區別して十七字の句を發句といふが通例なれども「俳諧を學ぶ」とか又は「俳諧に遊ぶ」とか云ふが如き場合には必ずしも俳諧と發句とを區別せずして兩者を包含する程の廣漠なる意に用ふる事も少からず。斯くて終に局外の人をして往々迷を生ぜしむるとあり。(余は世上の俳諧仲間に交はりしとなれば場處によりて其意義に相違あるや否や詳しきとは知らず)

因に云ふ。芭蕉又は其門弟等が俳諧は滑稽なりと稱する其滑稽といふ語は余が前に述べたる滑稽即

一

ち通常世人が用ふる滑稽に非ず。只和歌の單一淡泊なるに對して其雅俗の言語混淆し其思想の變化多くして且つ急劇なるを謂ふのみ。

### 連歌と俳諧

俳諧の連歌より出で連歌の和歌より出でたるは人の知る所なり。其始めは一首の歌の上半下半を二人して詠みたる程のものなりしが後には歌の上半即ち十七文字だけを離して完全の意味をなすに至れり。されど足利時代に在りては猶其趣和歌の上の句の如くにして上代の言語を以て上代の思想を叙するに止まれば其文學として讀者を感ぜしむるの度は在來の和歌に比して却て之に劣るものといふべし。且つ此時代の發句は所謂連歌の第一句にして敢てそれ許りを獨立せしめて一文學となす譯にあらねば其力を用ふる事も随つて專一ならず。之を讀めば多少の倦厭を生ぜしむるの傾きあり。松永貞徳徳川氏の初めに<sup>出で</sup>、連歌に代ふるに俳諧を以てせしより發句にも重みの加はりしか其發句は地口しやれ謎等の滑稽に過ぎざれば文學上の價值に至りては足利時代に比して更に一層の下落を來したりといふも酷評には非ざるべし。貞徳派千篇一律にして竟に新規なる思想も出でざりしかば宗因等起つて檀林の一流を創め一時は天下を風靡せしがこれ亦稍々發達したる滑稽頓智に外ならざるを以て忽ち芭蕉派の壓倒する所となりて今日に至る迄猶有るか無きかの有様なり。芭蕉は趣向を頓智滑稽の外に求め言語を古雅と卑俗との中間に取り萬葉集以後新に一面目を開き日本の韻文を一變して時勢の變遷に適應せしめしを以て正風俳諧の勢力は明治の世になりても猶依然として隆盛を致せるものなるべし而して芭蕉は發句のみならず俳諧歌連にも一樣に力を盡し其門弟の如きも猶其遺訓を守りしが後世に至りては單に十七文字の發句を重んじ俳諧連歌は僅に其附屬物として存するの傾向あるが如し。

### 延寶天和貞享の俳風

足利時代の連歌より芭蕉派の俳諧に遷るに貞徳派檀林流等の楷梯を經過したる事は前に述べたるが如し。然れども猶細かに之を觀れば其間無數の楷梯と漸次の發達とを経來りしものなり。寛文十二年撰べる貝おほひといふ書は芭蕉未だ宗房といひし頃編輯せし者なりといへども猶赤子のかた言まじりにしやべるが如く終に談林を離るゝと能はず。延寶八年に其角杉風がものせる田舎句合、常盤屋句合は稍其歩を進めたるに相違なきも未だ小學生徒が草したる文章を觀るの思ひあり。天和三年に刊行せし虚栗集に至りては著るしく俳諧の一時代を限りしものにて其魂は既に正風の本跡を得たりといへども其詞は猶甚だ幼稚にして暴露の嫌あるを免れず。貞享四年刊行の續虚栗は更に幾多の進歩をなして殆んど正風の門を覗ふ者と謂ふべし。同年の吟詠ある四季句合(載せて元祿元年刊都筑の原にあり)は滑稽に陥らず奇幻を貪らず景を自然の間に探り味を淡泊の裏に求めはじめて正風の旗幟を樹立したるも

のなり。(されど此四季句合の中には芭蕉翁一派の門弟ならざるもまじれり) 其後曠野集、其袋、猿蓑  
等續々と世に出で、終に芭蕉の功名をして千歳に不朽ならしめたり。此間の楷梯となりたる貞徳派を  
はじめ虚栗、續虚栗に至るまで終に此正風を發揮せしむるの段階に相違なしと雖其間或は退歩したる  
ことなきにもあらず。是固より何事の發達中にも免るべからざる運命なるべし。明治の大改革ありてよ  
り文學も亦過劇の變遷を生じ翻譯文、新體詩、言文一致等の諸體を唱ふるものありて大に文學界を騷  
がし其極世人をして其歸着する所を知らず竟に多岐亡羊の感を起さしむるに至れり。然れども天下の  
大勢より觀察し來れば是等も亦文學進歩の一段落に過ぎずして後來大文學者として現出する者は必ず  
古文學の粹を抜き併せて今日の新文學の長所をも採取する者なるべく而して是等は皆元祿時代に俳諧  
の變遷したると同じとならんと思はるゝなり。

### 足利時代より元祿に至る發句

天下稍々檀林の俗風に厭くに際して機敏爛眼の一俳人實井其角は別に一新體を創して世人を驚かさ  
んと企てたり。然れども俗語を用ひて俗客の一笑を買ふが如きは則ち前車の覆轍を踏むに等くして到底  
之れを傲ふべからず。さりとて和歌的連歌の句法を學ぶは陳腐にして復一個の新題目を加へ一種の新  
思想を叙述するに地なし。是に於て其角は之を漢土の詩に求めて始めて、始めて一種の新體を成せり。田舎句

合虚栗續虚栗の如きは即ち此流の句集とも謂ひつべし。今、古來の發句に付きて變遷の一斑を知らしむ  
る爲に左に時代の順序に従ふて時鳥を詠せし數句を擧げん。

待てばこそ鳴かぬ日もあれ時鳥	道譽(菟玖波)
待たで見ん恨みてや鳴く不如歸	實隆(新筑波)
あくといふ文字は無の字か郭公	春庵(鷹筑波)
一疋も音は萬疋そほとゝぎす	失名(毛吹草)
啼きさわげ日本つゝみの無常鳥	政定(貝お對ひ)
鐘カヽ、驚破時鳥草の戸に	其角(田舎句合)
半日の下戸閑居にたへず郭公	千春(虚栗)
時鳥背に星をするたか嶺かな	暮角(續虚栗)
朝顔の二葉にうれしほとゝぎす	調柳(都筑の原)
馬と馬よばりあひけり不如歸	鈍可(あら野)
時鳥鐘つくかたへ鳴音かな	湖水(其袋)
郭公何もなき野の門構へ	凡兆(猿蓑)
時鳥顔の出されぬ格子かな	野坡(炭俵)

俳書

連歌俳諧の撰集は足利時代に在りても菟玖波集(紀元二千十六年撰)以後稀れに之れ有りといへども多く刊行せしものにあらず。寛永年間に至りては編集せる書も多く且つ之を刊行せしものなれば時世の進歩と共に俳諧の盛運に赴きたるを見るべし。正保慶安承應明暦萬治寛文の間は次第に著作の多きを加ふといへども其の著るしく増加したるは延寶年間なり。余は特にこれか研究をなしたることなければ見當るまゝに書き付けたる者のみにても延寶年間の編著已に五十部になんくどす。就中尤も多きは延寶八年にして其の目を擧ぐれば

俳祝 軒端の獨話 洛陽集 向の岡 伊勢宮寄 西鶴大矢數(刊年は天和元年) 花洛六百句

猿蓑 阿蘭陀丸二番船 江戸大坂通し馬 俳諧江戸辨慶 破邪顯正返答 田舎句合 常盤屋句合 等にして猶此外に數多の著作あるべきなり。余淺學未だ是等の書の過半は一覽だになし得ずといへ前後の時勢より察するに多くは皆片々たる一小冊子に過ぎずして敢て後世數卷を一部として發行するものと同時に論ずべくもあらざるべし。しかばあれど如何なる小冊子ありとも二百餘年以前に在りて此くの如く多きを見るは其隆盛を卜するに十分なりと信するあり。天和貞享を経て元祿に至り愈々其

極點に達したるが如く寶永正徳享保の間に下りては刊行の俳書いたく減し盡し唯東華坊支考が十數部の著書あるのみとはなれりけり。是時に際して俳諧は暫時衰運の暗黒界に埋没せられたるの觀ありて芭蕉の英魂は其の死後二三十年に於て已に其靈威を失ひ盡したるが如し。

字餘りの俳句

俳句に字餘りの多きものは延寶天和の間を尤甚しとす。十八九音の句は云ふに及ばず時として二十五音に至るものありて却つて片歌よりも猶長し。今日にありて之れを見れば奇怪の觀なきに非ざれども俳風變遷の階梯としては是非とも免るべからざるものならんか。今廣く古人の句中より其格調の異なるもの數句を取りて列舉せんに

天にあふぎ地に伏し待ちの月夜哉  
古寺月なし狼客を送りける  
しほらしき物つくしちよろ木かいわり菜  
鶉やささえわたる橋の夜半の月  
夏衣いまだ風をとりつくさず  
あれよくといふもの獨り山櫻

立 圃  
北 鯤  
杉 風  
宗 長  
芭 蕉  
枳 風



五月雨けりな小田に鯉とる村童  
 月の秋に生れいづるや桂男  
 雛丸が夫婦や桃の露不老國  
 ところてんさかしまに銀河三千丈  
 五月雨の端居古き平家をうなり鳥  
 月に親しく天帝の婿に成たしな  
 曙の人顔牡丹霞に開きけり  
 新年の御慶とは申しけり八十年  
 有徳なる物汐干の潟なる大きな鯛  
 櫻菟翁如何なる人の何を以て櫻  
 玉祭る里や檜刈男香爐たく女  
 流るゝ年の哀世につくも髪さへ漱捨つ

等の如し。又十七音にても五七五の調子に外れたる者あり例へば

巖もる水木くらげの耳に空ニ  
 雪の鮎なまこ左勝水無月の鯛

八  
 藤句 重頼 羊角 蕪村 嵐雪 才丸 杜國 任口 由ト 杉風 松濤 其角 芭蕉 杉風 芭蕉

海くれて鴨の聲はのかに白し  
 等の如し。

芭蕉

### 俳句の前途

數學を脩めたる今時の學者は云ふ。日本の和歌俳句の如きは一首の字音僅に二三十に過ぎざれば之を錯列バリエーション法に由て算するも其數に限りあるを知るべきなり。語を換へて之をいはく和歌（重に短歌をいふ）俳句は早晚其限りに達して最早此上に一首の新しきものだに作り得べからざるに至るべしと。世の數理を解せぬ人はいと之をいふかしき説に思ひ何でうさる事のあるべきや。和歌といひ俳句といふもと無數にしていつまでも盡くるとなかるべし。古より今に至るまで幾千萬の和歌俳句ありとも皆其趣を異にするを見ても知り得べき筈なるに杯云ふなり。然れども後説はもと推理に疎き我が邦在來の文人の誤謬にして敢て取るに足らず。其實和歌も俳句も正に其死期に近づきつゝある者なり。試みに見よ古往今來吟詠せし所の幾萬の和歌俳句は一見其面目を異にするが如しといへども細かに之を觀廣く之を比ぶれば其類似せる者眞に幾何ぞや。弟子は師より脱化し來り後輩は先輩より剽竊し去りて作爲せる者比々皆是れなり。其中に就きて石を化して玉と爲すの工夫ある者は之を巧とし糞土の中よりうち虫を掴み來る者は之れを拙とするのみ。終に一箇の新觀念を提起するものなし。而して世の下るに

従ひ平凡宗匠平凡歌人のみ多く現はるゝは罪其人に在りとはいへ一は和歌又は俳句其物の區域の狹隘なるによらずんばあらざるなり。人間ふて云ふ。さらば和歌俳句の運命は何れの時にか窮まると。對へて云ふ。其窮り盡すの時は固より之を知るべからずといへども概言すれば俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未だ盡きずとするも明治年間に盡きんと期して待つべきなり。和歌は其字數俳句よりも更に多きを以て數理上より算出したる定數も亦遙かに俳句の上にあるといへども實際和歌に用ふる所の言語は雅言のみにして其數甚だ少なき故に其區域も俳句に比して更に狹隘なり。故に和歌は明治已前に於て略ぼ盡きたらんかと思惟するなり。

### 新題目

人或は云ふ人間の觀念は時勢の變遷と共に變遷する者なり。そは古來文學の變遷と政治の變遷とを比較して知るべきなり。而して明治維新の如く著るしく變遷したるとは古より其例少なく従つて文學上の觀念も亦大に昔日と異なるが如し。單に外部の皮相のみより見るも今日の人事器物は前日の人事器物と全く同じからず。刀槍廢れて砲礮天に響き籃輿は空しく病者の乗りものとなりて人車馬車漁車王侯庶人を乗せて地上を横行す。是等の奇觀は到る處にありて枚擧に遑わらず。此新題目此新觀念を以て吟詠せんか和歌にまれ俳句にまれ其盡くる所あるべからずと。對へて云ふ。そは一應道理ある説なれ

ども和歌には新題目新言語は之を入るゝを許さず。俳句には敢て之を拒まずといへども亦之を好むものにあらず。こは固より理の當然にして徒に天保老爺の頑固なる僻見より出づるもののみ思ふべからず。大凡天下の事物は天然にても人事にても雅と俗との區別あり。雅俗の解はこゝに述べ普通世人の唱ふる所に從ふて大差なかるへし。而して文明世界に現出する無數の人事又は所謂文明の利器なる者に至りては多くは俗の又俗陋の又陋なるものにして文學者は終に之を以て如何とも爲し能はざるなり。例へば蒸氣機關なる語を見て我們が起す所の心象は如何。唯精細にして混亂せる鐵器の一大塊を想起すると共に我頭腦に一種眩暈的の感あるを覺ゆるのみ。又試みに選舉競争懲戒裁判等の言語を聞きて後に如何なる心象を生ずるかを見よ。袖裡黄金を溢らせて低聲私語するの遊説者と思ひ内にあるれば覺えず微笑を取り落したる被説者と兩々相對するの光景に非ざれば則ち髯公解語の花を携へて席上に落花狼藉たるの一室を書き出さんのみ。此妄想に續きて發するものは道德墮類秩序紊亂等の感情の外更に一の風雅なる趣味高尚なる觀念あるべきやうなし。人或は云ふ美術文學は古に盛にして今に衰へたりと。以あるかな。

### 和歌と俳句

主人小厮店の一隅に立ちて他の髪を結び月代を剃る。八公熊公傍に在り。相對して坐す。八公叫んで

曰くしめたりしめたりと。熊公頭を垂れて一語なし。甲公乙公各々語りて曰く桂馬を以て王を釣り出すべし。曰く王頭の歩兵を突くべしと。器々市場の如し。是れ髪結床に將某を弄するなり。九霞山樵の山水一幅を掛けて下に池坊流の立花一瓶をあしらふ。庭間に松石相雜りて盆池青き處金魚尾を揺かす籠鳥一二盆栽三四皆な雅趣あらばるはなし。而して主客兩々笑はず語らず時に丁々の聲あるのみ。是れ別墅の竹房に碁を圍むの光景なり。

横町へ少し曲りて最合井釣瓶繩朽つるの邊晝顔時かぬ種をはへたるこなたの掃溜に臨みて竹格子まばらなる中にみいぢやんお花ぢやんを相手にして破れ三味線を鳴らす。絃聲板橋を踏み轟かすが如く歌聲犬の遠吠に似たり。裏店の奥比々此類なり。玄關深く見こみて鶯石遠く連り車馬門に満ちて小僮式臺に迎ふ。左の方一帯の板屏を見越して春色爛熳たり。晚梅早櫻相交るの間玉欄屈曲して玻璃窓中佳人瑤箏を彈ず。珠玉盤上を走り幽泉岩陰に咽ふ。鶯腔稍々澁なとり雖も終に百鳥の群鳴に勝る。

甲店の伴當倉皇として街上を走る。乙肆の主管袖を扣へて止めて曰く僕前日大坂の募集に應ず。入花料殆んど五十錢を費す。而して一句の賞點に入るなし何事の胸わるさぞ。甲曰く前月の卷己に成るや否や。乙曰く知らず。一行商傍に在り曰く彼卷己に開きたり。天は某。地は某なり。我句幸にして十内に在り云々。甲乙皆失望の休あり。俳句を弄するもの皆此流の人。一俟一伯會々相逢ふ。俟曰く前月の歌會貫下秀歌を詠ず。一坐感賞して三代集中のものとせり。健羨の至りなり。伯曰く敢て當らす

今夜某々を弊家に召して萬葉の講筵を開く。幸に駕を枉げられよ云々和歌を詠ずるは此種の人なり。嗚呼何ぞ將某、三絃、俳句の相似て碁、箏、歌の相類するや。前者は下等社會に行はれ後者は上流社會に行はる。前者は其起原新らしく後者は其起原古し。新し故に俚耳に入り易し。古し故に雅客の興を助く。將某盤は碁盤より狭く而して其手碁より多し。三絃の絲は箏より少く而して其音箏より多し。俳句の字は歌より短く而して其變化歌よりも多し。變化多ければ奇警斬新の事をなすべし唯身猥俗陋に陷るの弊あり。變化少ければ優美清淡の味あり唯陳套を襲ひ糟粕を嘗むるの譏を免かれず。随つて將某、三絃、俳句は入り難く碁、箏、歌は入り易し。入り難けれども上達し易く入り易けれども上達し難し。此の六技は蓋し奇對といふべし。

寶井其角

蕉翁の六感なるものに六弟子の長所を評するの語あり。されども其語簡單にして未だ盡さいるのみならず往々其要を得ざるものあれば漸次にこれが略評を試みんとす。初めに其角を評して「花やかなる事其角に及ばず」といへり。其角の句固より花やかなる者少からず。例へば

鶯の身をさかさまに初音かな

白魚をふるひよせたる四ッ手かな

等の如し。然れども其角一生の本領は決して此婉麗細膩なる所にあらずして却りて傲兀疎宕の處、怪奇斬新の處、諧謔百出の處に在りしことは五元集を一讀せしもの、能く知る所なり。其傲兀疎宕なる者を擧ぐれば左の如し。

鐘一ツうれぬ日はなし江戸の春

夕涼よく予男に生れける

小傾城行きてなぶらん年の暮

其角は實に江戸ッ子中の江戸ッ子なり。大盃を滿引し名媛を提挈して紅燈緑酒の間に流連せしとも多かるべし。されば芭蕉も其大酒を誡めて「舜に我は飯喰ふ男哉」といひし程の強の者なれば是等の句ある固より怪しむに足らず。而してこれ即ち千古一人の達吟たる所以なり。其怪奇斬新なる者は

世の中の榮螺も鼻をひけの春

枇杷の葉や取れば角なき蝸牛

初雪に此小便は何やつぞ

等の如し。是等即ち巧者巧を弄し智者智を逞ふする所にして其角が一吟人を瞞着するの手段なり。されば座上の即吟に至りては其角の敏捷一座の喝采を博すること常に芭蕉に勝れたりとかや。其諧謔百出

人頤を解するものもまた才子の餘裕を示し英雄の人を欺むく所以なれば其角に於てこれ無かるべけんや。例へば

こなたにも女房もたせん水祝ひ

饅頭で人を尋ねよ山櫻

みつつくの頭巾は人に縫はせけり

等の如し。然れども多能なる者は必ず失す其角の句巧に失し俗に失し奇に失し豪に失する者少からず而して豪放迭宕なる者は常に暴露に過ぐるの弊あり。其角句中其骨を露はす者を擧ぐれば

吐かぬ鵜のほむらに燃ゆる箒哉

二星私かに憾む隣の娘年十五

此秋暮文覺我を殺せかし

杯あり。扱又其角句中一種の澹嫺穩整なる文字ありて其調稍々嵐雪越人に近きが如し。例へば

あくる夜のほのかにうれし嫁が君

明星や櫻定めぬ山かつら

秋の空尾の上の杉にはなれたり

杯にして前に連らぬし十數句とは其の趣いたく變れり之を要するに其角は豪放にしてしかも奇才あり

奇才ありてしかも學識あり。されば時として豪放の眞面目を現はし時として奇才を弄し學識を現はすなど機に應じ變に適して盤根錯節を斷ずること大根午旁を切るが如くなれば芭蕉も之を賞し同門も之に服し終に兒童走卒をして其角の名を知らしむるに至りたり。其角はそれ一世の英傑なるかな。

嵐雪の古調

服部嵐雪は古文を好みしものと見え其作る所の俳句も古書古歌に憑りたるもの多く其語調も亦和歌に似たる者少からず。例へば

ぬれ椽になづなこぼるゝ土ながら

葎しんみあけて莖立くさたち買はん朝まだき

石女うまづめの雛かしづくぞ哀れなる

みる房やかゝれとてしも寺の尼

等の如し。又同人の句に

行燈を月の夜にせんほどゝぎす

といふは世の中へ知れ渡りたるものなるがこは萬葉集にある家持の

保等はと登あ藝ま須す許こ欲ゆ奈な積あ和わ多た禮れ登と毛も之し備び乎乎

都久つ欲い爾に奈あ蘇そ倍へ曾そ能の可か氣け母も見み牟む

といへる歌をそのまま俗譯せしものにして餘り珍重すべきものとも思はれず。されど俳家者流の宗匠及び其の門弟等は皆學問淺薄なる者のみ多ければさるとのありとも知らず。よし之れを知る者あれば却つてそを賞讃して古歌にちなみたる名句なりなど云ふこと恰も今日の平凡學者がこは歐洲の學者某の説なりといはれ尤も善き證論なりと思へるが如し。げにも片腹いたきことぞかし。余は此の嵐雪の句よりも

蠟燭のひかりにくしや郭公

提灯の空に詮なし郭公

などといふ句の同じ意ながら古歌を繙案したることいと妙なれと思ふなり。

服部嵐雪

蕉翁六感の中に「からびたる事嵐雪に及ばず」とあるは適評なるべし。嵐雪の句温雅にして古樸しかも時に從ふて變化するの妙は其角の豪壯にして變化するものと相反照して蕉門の奇觀と謂ふべし。其所謂からびたる句は

梅一りん一りん程のあたゝかさ

相撲取ならぶや秋の唐錦  
黄菊白菊其外の名はなくもかな

の類にして此嵐雪一家の格調は終に他人の摸倣し能はざる所なり。

文もなく口上もなし 粽五把  
蒲團着て寝たる姿や東山

是等の句は實景實情を有の儘に言ひ放しながら猶其の間に一種の雅味を有するものにして是れ亦嵐雪の獨り擅まゝにする所なり。蓋し嵐雪は一見識ある人なれども稍理想には乏しきものゝ如く随つて宇宙の事物を観察するに常に其の表面よりするの傾きあり。是を以て其表面的の觀察も亦重もに些細なる事物に向つて精密なるが如し。例へば

花に風輕く來て吹け酒の泡  
五月雨や蚯蚓の通す鍋の底  
白露や角に日を持つ 蝸牛  
顔につく飯粒蠅に與へけり  
門の雪白と鹽の姿かな

の如き其一斑を知るに足るべきなり。猶き此種の觀察の滑稽なる者には

君見よや我手入るゝぞ莖の桶

あり。又た人情の上に於ける觀察も曾て悽楚慘憺の處に向はず、はた勇壯豪放の處に向はずして常に婦女若しくは兒童の可憐なる處に在るが如く見ゆ。そは

ほつくと喰積あらす夫婦かな  
石女の雛かしづくぞあはれなる  
我戀や口もすはれぬ 青鬼灯  
岡見すと妹つくろひぬ小家の門  
出代やをさな心にもあはれ  
竹の子や兒の齒莖のうつくしき

等の數句を見ても知るべきなり。猶此外に

秋風の心動きぬ繩すだれ  
順禮に打ちまじり行く歸雁かな  
武士の足で米とぐ霰かな

等の類あれども其角の變幻極りなきとは大に異なりて却りて味深き處あり。されば嵐雪の變化は其角

の天地に渡りて縦横奔放するの類に非ずして僅かに一小局部内に彷徨するものなれども其雅味を存するの多きは其角も亦一步を譲らざるべからず。宜なる哉「門人に其角嵐雪あり」と並稱せしや。

向井去來

「實なる事去來は及ばず」とは蕉翁六感の中に去來を評するなり。而して此評實に去來を盡すものと謂ふ可し。去來人と爲り温厚忠實其芭蕉に事ふること親の如く又君の如く常に親愛と尊敬とを失はざりしかば芭蕉も亦之を見ること恰も吾愛見の如くにして他の門弟子とは一樣に思はざりき。されば芭蕉の去來に向つて或は之を褒め或は之を叱るも皆師の弟子に於ける關係より出でずして親の子よ於けるが如き愛情より發するものなり。去來曾て芭蕉と共に正秀亭に會す。其座の俳諧に去來第三を付けたるに其句宜しからずとて芭蕉これを添削しけるが會はて後芭蕉は去來を叱りて「斯くのびやかなる第三を付くること前句の景色を探らず未練の事なり此度の耻は是非一度雪かんと心かくべし」云々とて夜もすがら怒りたりと。正秀も弟子なり去來も弟子なり。弟子が弟子の前にて仕そこなふたりとても芭蕉に於て何か有らん。然るに斯くまで叱責するとは弟子を以て之を見ず骨肉の如く之を愛するが爲なるべし。去來實に此の如き人なれば其作る所の句も亦優柔敦厚にして曾て輕躁浮泛に流るゝの弊を見ず。其角の如く奇を求め新を探りて人目を眩するのたなく又丈草の如く微を發き理を究めて禪味

を悟るの識なしといへども却て平穩眞樸の間に微妙の詩歌的觀念を發揮せしが爲に其句を讀む者一たび之を誦すれば終に復忘るゝ能はざるに至る。蓋し其意匠の幽遠に馳せずして却て高尙なるのみならず、其格調極めて自然にして敢て人工斧鑿の痕なければなるべし。其景を叙するの處情を叙するの處神理天工、一心一手の間に融會して外面一片の理想を着けず裏面一點の塵氣を雜へざるに至りては芭蕉も亦之を摸倣すること能はず。況んや其嵐二子をや。況んや其他の作家を以て自ら任ずる許六、支考の輩をや。試みに其句數首を擧ぐれば

上り帆の淡路はなれぬ汐干哉  
涼しさや夕立ながら入日影  
乗りながら秣はませて月見哉  
應くといへど叩くや雪の門

芭蕉の鉢叩聞かどんて落柿舎を音づれけるに折節鉢敲の來ざりければ

帯こせまねて見せん鉢叩

是等の句は皆其句の妙靈なるのみならず去來其人の性質躍然として現れたるを見るべし。去來の句今日に傳ふる者僅に二百句許りにして隨ひて一題數句ある者は稀なり。只秋月と時雨の二題は吟詠各十句の多きに及び而して他の些事微物に至りては一句だに無き者少からず。是を以て見るも去來の觀念

は毎に那邊に向ひしかを知るに足らん。又去來は武士なる者の意氣凜然たる所を忘れさりしと見えこ  
れを證するの句多し。

元日や家に譲りの太刀はかん  
筭の時よりしるし弓の竹  
鎧着てつかれためさん土用干  
秋風や白木の弓に弦はらん  
鴨啼くや弓矢をすて、十餘年  
老武者と指やさ、れん玉霰  
時として豪壯の氣を帶ふる者あり。然れども終に粗穢に失せず。

湖の水まさりけり五月雨  
時として教誨の意を含む者あり。

何事ぞ花見る人の長刀  
時として稍、織巧にして奇創なる者あり。然れども其妙味は奇創織巧の處に非ずして却て神韻縹渺自  
然に渾成する處にあるか如し。  
瘦せはて、香にさく梅の思ひ哉

時鳥啼くや雲雀の十文字  
卯の花の絶間叩かん闇の門

芭蕉曰く上手にして始めて仕そこなひありと。蓋し去來も亦其一人なり。其奇に失する者  
年の夜や人に手足の十許り

上臈の山莊に候し奉りて  
梅が香や山路獵入る犬のまね  
其俗に失する者

賽錢も用意顔なり花の杜  
時鳥きのふ一聲けふ三聲  
從兄弟に逢ふて

昔思へ一ッ畠の瓜茄子

内藤丈草

僧丈草は犬山の士なり。繼母に仕へて孝心深し。家を異母弟に譲らんとてわざと右の指に疵をつけ刀  
の柄握り難き由を言ひたて家を遁れ出で、道の傍に髪押し斬りそれより禪門に入る。其時の詩あり。



多年負屋一蝸牛。 化做蛄蟪得自由。  
火宅最惶涎沫盡。 偶尋法雨入林丘。

其後芭蕉の弟子となりて俳句を學びしが斯る心だての大丈夫なればにや芭蕉もいたく之を愛し「人の上に立たんことを越ゆべからず」とはじめより喜べりとす。されば丈草も深く芭蕉に懐き其死後も義仲寺のほどりに草廬を結びて一生を終へたり。明和の頃蝶夢なる俳人、去來發句集丈草發句集を編み其端書に記するに蕉風の正統を得し者は去來丈草二子なり。されども此二子は名聞を好まず弟子をも取らざれば後世之を祖述するものなく却りて其角嵐雪の流派のみ盛に行はれたり云々の意を以てせり。是れ實に去來丈草の知己と謂ふべし。

丈草の俳句を通覽する者は其禪味に富むことを心づかぬ者は非ざるべし。少くとも諸行無常といふ佛敎的の觀念は常に丈草の頭腦を支配せしものと思しく其種の作句實に多し。併しながら丈草の句は所謂坊主の坊主臭きものにして多くは暴露に過ぎ稍厭ふべきものあり。之を芭蕉の禪味を消化して一句の裏面に包含せしむるものに比すれば及ばざること遠し。例せば

啄木鳥の枯木探すや花の中  
眞先に見し枝ならん散る櫻  
聖靈も出て假の世の旅寐かな

ぬけ殻とならんで死る秋の蟬  
着て立て夜の衾も無かりけり  
歸り來る魚のすみかや崩れ簀  
其尤巧妙にして蕙雅なる者は

取りつかぬ力で浮ぶ蛙かな  
其尤拙劣にして平淺なる者は

贈新道心

蚊屋を出て又障子あり夏の月  
此外禪味を含まずして格調の高きこと去來の壘を摩する者あり。

子規なくや湖水のさゝ濁り  
黒みけり沖の時雨の行どころ  
水底の岩に落ちつく木の葉哉

の類なり。又輕快流暢の筆を以て日常の瑣事を拈出するは丈草の長所なるが如く  
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴  
ひさまあくや蚤の出て行く耳の穴

つゝ立て帆になる袖や涼み舟  
夜咄の長さを行けばどこの山  
屋根ふきの海をねちむく時雨哉

杯の例あり。又丈草の好題目として擇ぶ所のものは動物にして丈草、句、中、の、三、分、の、一、は、皆、禽、獸、蟲、魚、に、關、係、せ、り。是れ即ち芭蕉去來が好んで天象地理の大觀を吟詠するとは大に異なりて丈草の一、籌、を、輸、す、る、所、以、亦、こ、ゝ、に、在、る、可、し。俳句に擬人法を用ふるは後世に多くして元祿前後には少き様なるが丈草は例の動物を取りて擬人的の作意を試みたり。

我事と泥鰌のにげる根芹かな  
大原や蝶の出て舞ふ臙月  
夕立に走り下るや竹の蟻  
啼きはれて目さしもうとし鹿の形  
等のたぐひにて是れ恐らくは禪學の上より得來りしものならんか。

### 東花坊支考

東花坊支考は蕉翁晩年の弟子なり。人と爲り磊落奇異敢て法度に拘はらず。芭蕉世に在るの間は吟詠妙境に到りて他の高弟をも凌駕しいと頼もしく見えたり。然るに芭蕉死して後は自ら門戸を構へ學識に誇り多才を頼み妄りに芭蕉の遺教と稱して數十卷の俳書を著し甚だしきものは自ら書を著し自ら解釋と批評とを加へて以て天下に刊行するに至れり。是に於て其句多く輕佻浮泛に流れて往々芭蕉正風の外に出でしが其極終に美濃派の一派を起し今日に至るまで多少の勢力を有して全國に蔓延せりといふ。支考の性行此の如くなれば其吐く所の俳句も亦一種の理想を含む者十中八九まで是れなり。

月花の目をやすめばや春の雨  
鶴に乗る支度は輕し衣がへ  
世の中をうしろの皴や更衣  
灌佛やめでたき事に寺参り  
魂棚にこちらむく日を待つ身かな  
名月やけふはにぎはふ秋の暮  
一俵も取らで案山子の弓矢かな  
隙八や瘦せは佛に似たれども  
此の如きもの數ふるに暇あらず。其  
笠着せて見ばや月夜の鶏頭花

と云ふに至りては理想已に極まりて稍狂に近きものなり。此他理想といふべからざるも其意匠自然に出でずして斧鑿の痕を存するものあり。即ち

梅が香の筋に立ちよる初日かな

野は枯れてのぼすものなし鶴の首

二ツ子も草鞋を出すやけふの雪

等の類なり。擬人法はもと理想より生ずるものにして文章の此法を用ひしことは已に言へり。支考に至りて此種の俳句實に夥多にして動物植物を形容するの慣手段と爲せしが如し。其例を擧ぐれば

花の咲く木はいそがしき二月かな

鶯の肝潰したる餘寒かな

虵の目の何か悟りて早合點

片枝に脉や通ひて梅の花

百合の花たゞものあちら向きたがる

物思ひひく鳴く鷄かな

腸に秋のしみたる熟柿かな

節々の思ひや竹に積る雪

等の如し。又多少の理想なきに非るも意匠諧謔に陥りて風雅の趣に乏しきものあり。例へば

蓮の葉に小便すれば御舍利かな

牛になる合點じや朝寐夕涼み

風や鼻を出し行く人はなし

寒ければ寐られず寐ねば猶寒し

の類にして支考が一生の本領も亦こゝに在りしなるべし。されば後來美濃派の起りしも主として此處より入りしが如し。蓋し支考は固より一個の英俊ある俳家たるを失はず。其賦する所稍神韻に乏しと雖も滑稽諧謔の中に一定の理想ありて全たく卑俗に陥るを免れたり。然れども後世無學の俗輩一片の理想無くして此諧謔を學ぶ、俗陋平淺ならざらんと欲するも得んや。支考の多能なる俳句に於て到る處必ずしも前に論じたる境涯に止まらず時として其角去來を學び時として尙白涼菟に擬する者あり。是れ支考の支考たる所以なるべし。其の例

これ迄かゝるとて春の雪

水澄て初の芽青し苗代田

餅くはぬ旅人はなし桃の花

里の子の燕握る早苗かな

我笠や田植の笠にまぎれ行く  
裸子よもの着ばやらん瓜一つ  
初霜や蘆折れ違ふ濱堤  
一つ葉や一葉くりにけさの霜

志多野坡

志多野坡の俳句は意匠の清新奇抜なるものを取りて作するを常とす故に其句多くは

初午や鍵をくはへて御戸開  
苗代や二王のやうな足の跡  
郭公顔の出されぬ格子かな  
崖端を一人が覗けば花の山  
夕涼みあふなき石に上りけり  
落椿餘りもろさについで見る  
飛びかへる竹の霰や窓の内  
の類なり。其尤諧謔を弄する者に至りては

長松が親の名でくる御慶かな  
鉢巻を取れば若衆ぞ大根引  
の如き者あり。其句法の警抜人を駭かす者は

はのくと鴉黒むや窓の春  
つしまれて水ものびたる蓮かな  
這梅の残る影なき月夜かな  
等なり。之を要するに野坡は常に滑稽を以て人頤を解かんとする者の如く其の理想に至りては甚だ低  
きかと思はる。偶

葉かくれて見ても朝顔の浮世かな  
豆とりて我も心の鬼打たん  
等の句あれども恐らくは其眞面目にあらざるべし。されば戀の句に  
振袖のちらと見えけり闇の梅  
娘ある隣の衣どうたればや

とあるが如きは淺薄暴露殆んど讀むに堪へず。其理想は斯く低しといへども其度量快豁なるは曾て其  
家に忍び入りし盜賊を相手に談笑せし一事を以ても知るべく従つて其句も亦紆餘迫らざる處ありて假

令上乘に非るも蕉風の特徴を存して大に愛すべきものなり。即ち

押して見る山の乾きや露の墓

食の時皆あつまるや山櫻

静かには啼かれぬ雉の調子かな

猫の戀初手から啼て哀れなり

秋もや、雁かりそろふ寒さかな

此頃の垣の結ひ目や初時雨

力なや、膝をかゝへて冬籠

等の句を見て其一斑を見るべし。歳暮の句に

年のくれ互にこすき錢づかひ

とあるが如きは元商家に生れたる故に其觀察のこゝに及びしものなるべけれども此等の意匠は其人情を穿つに拘はらず卑俗に流れて偶々嫌厭を生せしむるに足るのみ。蕉翁六感に「おどけたる事野坡に及ばず」とあるは中らずといへども遠からざるの評なり。

### 武士と俳句

諸侯にして俳諧に遊びし者、蟬吟、探丸、風虎、露沾、肅山、冠里、諸公あり。武士にして俳諧に遊びし者、芭蕉をはじめ比々皆然らざるはなし。されど中に就きて俳諧のみならず武士としても亦名高き人々は、大高子葉、富森春帆、神崎竹平、菅沼曲翠、神野忠知等なり。蕉門十哲の中、性行の清廉と吟詠の高雅とを以て古今に超絶する二豪傑、向井去來、内藤丈草も亦武士のはてにして殊に丈草は繼母に孝を盡し弟に家を譲らんが爲に我指に疵をつけ刀の柄握り難き由いひたて、禪門に入りたる人なりとぞ。夫れ風流は弓馬劍槍の上に留らず。雅情は電光石火の間に宿らず。否これらは寧ろ風雅の敵にして、芭蕉も行脚の掟には「腰に寸鐵たりども帶すべからず惣て物の命を取る事なかれ」といひ、去來も亦た

何事そ花見る人の長刀

と咏して人口に膾炙せり。然りといへども誠實なきの流は浮華に流れ易く節操なきの詩歌は卑俗に陥るを免れず。文學美術は高尚優美を主とするものなり。而して浮華卑俗を以て作られたる文學美術ほど面白からぬものはあらず。否これほど世を害するものはまたとあるまじと思はる。後世和歌俳諧の衰へたるも職としてこゝによらずんばあらず。享保年間芭蕉を去る事遠からず。而して已に三笠附といふ事もはら行れて一種の博奕となり従つて徳川氏も亦法律を設けて博奕と同じく之を禁ずるに至れり。近時に至り此三笠附なる者は餘り流行せずといへども宗匠のあとつぎも發句の點も皆金錢に比

例する世の中、扱もうるさし。今初めにあげたる數家の俳句を左に連ねて二階からの目薬となさん。

しら炭や焼かぬ昔の雪の枝  
 馬叱る聲も枯野の嵐哉  
 なんのその巖も通す桑の弓  
 どんでいる手にもたまらぬ霞哉  
 鴨啼くや弓矢をすてゝ十餘年  
 啄木鳥の枯木探すや花の中

忠 知  
 曲 翠  
 子 葉  
 春 帆  
 去 來  
 丈 草

### 女流と俳句

女流俳句を嗜む者少からず。其の風調亦た一種のやさしみありて句作の強からぬ所に趣味を存すること多く却て男子の拈出し能はざる細事に着眼して心情を寫し出すこと其微に入り以て讀者を惱殺せしむるものあり。大凡世の人は女は歌こそよまほしけれ。歌はいみじうみやびたるわざにて鬼神をもひしぎたけきものゝ心のをも和ぐるものなれどもなまなかに心ひなびて詞もむくつけき俳諧などしたらん女はよろづに男めきてあらあらしくなりなんと予いふなる。これ固より一理ある論なれどもさのみ一概にはいふべからず。古と今とは言語の變りあれば深閨に養はるゝ上臈すら古學を修めぬもの

はたやすく和歌をよみいづべくもあらず。さして下々のいとなみにひまなきは、歌よむすべもしらねば卅一文字をつらぬるとだにわきまへず。さるものは心まかせに俳句など口ずさまんとつきくしく興ある樂なるべし。且や古今の相違は言語の上のみにあらず生活の方法眼前の景物まで盡く變りはてたれば日常の事又はそれより起る連想のたぐひも古人の窺ひ得ざる所多し。而してをを詠み出でんとするには是非とも今日の俗語を用ひざるべからず。殊に女子の目撃する瑣事に至りてはいよいよ之を雅言に求めて得られざるものゝみ多きを奈何せん。たゞ古今に渡り東西に通じて一點の相違なき者は人情なり。故に戀歌の類は必ずしも鄙語を用ふるに及ばずといへども其他は最早之を用ふるの已むを得ざるなり。和歌には伊勢小町相摸紫式部清少納言の如き雲上の女傑輩出せしかども俳諧には上臈なき故に卑俗の二字を以て排し去る者多きはひが事。言葉俗なりども心うちあがりたらんは如何ばかり高尚ならまし。只此評を受くる者は俳諧社會に俗客入り來りて俗氣の紛々たるが爲ならんのみ。

### 元祿の四俳女

元祿前後の俳諧に遊ぶ婦女子の中、まづ捨女、智月、園女、秋色を以て四傑とも稱すべし。さて女は燕子花の如し。うつくしき中にも多少の勢ありて、りんご力を入れたる處あり。智月尼は蓮花の如し。清淨潔白にして泥に染まぬ其色浮世の花とも思れず。秋色は撫し子の如し。ゆら／＼と風に立ちのびて

やさしうさきいでたる中にくねりならばぬあどけなさに其人柄まで思ひやられてなつかし。園女は紫陽花の如し。委強くして心おとなしきは俳諧の虚實にかなひ日々夜々の花の色は風情の變化を示して終に閑雅の趣を失はずともいはん。而して四女の中句作にては、余は園女を推して第一とす。園女は見識氣概ありて男子も及ばざる所あり。其某禪師に答ふる書の如き曾て婦女子の婉柔謙遜なる所を失ふて、唯剛慢不遜なる一丈夫の趣あり。されど其俳句に遊ぶに際しては決して婦女子の眞面目を離れず。蓋し得難きの女傑と謂ふべし。近時の女學生以て如何となす。これらの人々の俳句に就て三四を抜萃して左に掲げん。

うき事になれて雪間の嫁菜かな

すて

日くらしや捨てゝおいても暮る日を

同

思ふ事なき顔しても秋のくれ

同

粟の穂や身は敷ならぬ女郎花

同

我年のよるともしらざ花盛

智月

有と無と二本さしけりけしの花

同

盆に死ぬ佛の中の佛かな

同

木枯や色にも見えずちりもせず

同

井戸端の櫻あふなし酒の酔

秋色

戀せずば猫の心の恐ろしや

同

雉の尾のやさしうさはる萱かな

同

佛めきて心かかるとはちす哉

同

山松のあはひくや花の雲

その

鼻紙の間にしぼむすみれかな

同

あるほどのだてしつくして紙衣哉

同

當麻のまんたらを拜みて

同

衣かへ自ら織らぬ罪深し

同

### 加賀の千代

加賀の千代は俳人中尤有名なる女子なり。其の作るの所の句も今日に残る者多く俳諧社會の一家として古人に譲らざるの手際は幾多の鬚鬚男子をして後に瞠若たらしむるもの少からず。俳諧の上にも男子にあらざれば言ふべからざると女子にあらざれば言ふべからざるとあり。今千代の句を以て兩者を對照するも亦た一與なるべし。

母方の紋めつらしやきそ始  
我裾の鳥も遊ぶや着衣はじめ

山 蜂  
千 代

前者は男にして始めて言ふべく後者は女にして後ち作し得べきものなり。

馬下りて若菜つむ野を通りけり

一 具

仕事ならくるゝをしまじ若菜摘

千 代

妻にもと幾人思ふ花見かな

破 笠

足跡は男なりけり初櫻

千 代

子もふまざ枕もふまざ時鳥

其 角

男さへきかれぬものを郭公

千 代

折からの嫁くらべ見ん田植哉

千 代

けふばかり男をつかふ田植かな

其 角

早乙女に足洗はするうれしさよ

千 代

早をとめや若菜つみたる連もあり

支 考

出女の口紅をしむ西瓜かな

千 代

紅さいた口もわするゝ清水哉

千 代

余所目に見る支考の句はをかしく我身の上を思ひかへしたる千代のはいとほし。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

芭

白きくや紅さいた手の恐ろしき

千 代

芭蕉は園女をほめて吟じ千代は己を卑下して詠ず。

妹なくてうたゝね悔ゆる火燧哉

淺 山

尼になりしとき

髪を結ふ手のひまあいてこたつ哉

千 代

時 鳥

連歌發句及び俳諧發句の題目となりたる生物の中にて最多く讀みいでられたるものは時鳥なり。此時鳥といふ鳥は如何なる妙音ありけん昔より我國人にもてはやされて萬葉集の中に入りたるもの既に百餘首に上る位なれば其後の歌集にもこれを二なく目出度ものに詠みならはし終には人數を分けて初音の勝負せんとて雲上人の時鳥きゝにと出で立てるとなど古きものゝ本に見えたり。されば其餘流をうけたる連歌俳諧に此題多きも尤の譯にて若し古今の發句の中にて時鳥に關したるものを集めなば恐らくは幾萬にもなるべからんと思はるなり。支那の詩にも子規を詠じたるもの多けれども多くはこれ



を悲しきものにいひなせり。西洋の詩にも我子規に似たる鳥を詠みたるものありてこは皆其聲をうれしきかたに聞くが如し。あはれ果報なる鳥よ。なの一聲は命にもかへて聞かんことを思はれ千餘年前より今日に至るまで幾千萬の詩人をして其の腦漿を絞り出さしめたり。世の鳴蛙噪蟬果して何の顔かある。はた空しく川柳都々逸の材料となりて一生を送了する阿房鴨の面の皮のあつさよ。

時鳥に關する古人の發句十數首をあぐれば

時鳥	なかぬ	初音	ぞめ	づら	しき	一遍上人
山彦	の	聲	より	かく	や	郭公
ほと	と	き	す	思	は	ぬ
鶯	の	捨	子	なら	な	け
郭公	大	竹	原	を	も	る
時鳥	く	と	て	寐	入	り
ほと	と	ぎ	す	啼	や	湖
蜀魄	な	く	や	雲	雀	の
ほと	と	ぎ	す	雲	踏	み
目には	青	葉	山	ほ	と	と
						ぎ
						す
						初
						經

子規	二十	九	日	も	月	夜	哉	黎	太	
川舟	や	あ	と	へ	成	た	る	郭公		
子規	啼	て	江	上	數	峯	青	し	道	
この	雨	は	の	つ	引	な	ら	し	時鳥	一
									茶	彦

扱はあの月がないたか時鳥

時鳥の句の中にて世人の尤も能く知りたるものは

扱はあの月がないたかほととぎす

といふ句なり。此句の初五文字を「一聲は」として或は芭蕉の作といひ或は其角の作といふは杜撰なる俗説なり。俳家奇人談には瓢水の作なりといひ温故集に藻風とあれば藻風は瓢水の別號かといへり。余近頃學堂の著せる真木柱(元祿十年刊)を見るにはじめに中古の發句として擧げたる中に

扱はあの月がないたか郭公 一三

とあり又終りの方に

舟のつくまであとを見かへる

扱はあの月が啼たかほととぎす

中興の發句を取合たる可謂奇妙云々

とあり。されば此の句の作者は一三にして藻風は附合の節に此成句を應用したる者なること明らかしそほとまれ此句は人口に膾炙して後徳大寺の和歌を翻案して更に巧妙なりと稱ふる人も少からず。然るにさきつ頃宗牧發句帳を繕きしに

月や聲きいでみつゝる郭公

といふ句を見つけたり。之を前の句に比するに其調は連歌と俳諧との區別あれども其命意は則ち符を合すが如し。其剽竊なるかばた暗合なるかは知るによしなけれども百餘年前に在りて已に此句ありとすれば前の句が得たる名譽の過半は之を宗牧に譲らざるべからざるなり。文學に限らず天下此の如きたぐひ多し其寛を雪き其微を聞くは學者の義務なるべし。洋書を抜萃翻譯して著作と號し古書を翻刻出版して我編纂といひ以て初學者田舎漢を感はさんとする當時の紳士學者は果して何する者ぞ。

時鳥の和歌と俳句

伊勢の勾當杉田望一は盲人にして俳諧の達者なりしかども寛永中に没せし人なれば其作亦幼稚にして今日よりいへばこれといふべきものなし。只其

それときく空耳もかなほとゝきす

といふ句ばかりは後世にてもほむるものなるがこは後撰集の歌に

時鳥はつかなる音をきゝそめて

あらぬもそれとおほめかれつゝ 伊勢

とあるより得來りしものなるべし又後世の句なるが

時鳥なくやこぼるゝ池の藤 抱儀

箱根山

郭公人も名のりをしつゝ行 雨考

といふあり。前者は家持の

はるゝに鳴く時鳥たちくゝと羽ふれにちらす藤波の花なつかしみ云々

といふより來り後者は千載集中の

あふ坂の山時鳥名のるなり 關もる神や空にとふらん 師時

とあるより脱化したるものなり。又近頃出版せしある俳書を見しに

時鳥初聲きけばめづらしき 友まちえたる心地こそすれ

といふ千蔭の歌を取りてか

よい友にあふた心地よ時鳥

とありしが如きは拙の又拙なるものなり。發句も俗客又は無學者の悪戯場となりしより愈々出で、愈々陳腐なるものとはなれりけり。

初嵐

一年の内風多し。春風はこそくられるが如く秋風はつめらるゝに似たり。こそぐられてははしだらなく睡り倒れつめられて後は身體りんどしまりて警むる所ろあり。况んや初嵐野分二百十日なんどありて秋の天氣は男の心にもたどへたるをや。二百十日の頃は稻つくる作男ならぬも米あきなふ商人ならぬも氣象臺の役員ならぬも如何に〜と空のみ打ち仰ぐ夕暮に一點の黒雲丑寅の方に出没せしが見る〜墨を流してはや頭の上に見あぐる程にもなりぬ。何程の事があらんと枕に就きしが雨戸烈しく吹きはなす音に目覺めて

山風に野分かさなる寐覺かな

奇淵

と驚きしも五風十雨順を失はざる大御代の癖とて

朝露はさりげなき夜の野分哉

宗長

冷々と朝日うれしき野分かな

と晴れ渡りて嬉しや胸のすきたる心地なり。

君か代も二百十日はあれにけり

萩

我書窓の下に竹垣にそふて一本の萩生ひひろごりて軒端近く風に打ち返さるゝさまけふや花咲くらんあすや花亂すらんと朝な夕な打ち見やる程にそれかあらぬか置き亂す白露の間より紫のほのかに見えそむるに

ほつくと花になるなり萩の露

月居

といふ句ぞまづは思ひ出されける。うれしさに庭下駄穿ちて近より見れば今日咲きそめしと思ひしに

萩の花咲くといふ日は亂れけり

禹洗

机の下に歸りてしばしは書讀みしもいつしかに又萩の方のみ見られて

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉

實によくも萩の風姿を形容したりけりと坐ろに歎賞せらる。翌朝まだきに起き出で、見ればけふもや眞盛りなるらんと思ふ許りなるに

序志

あたりへもよられぬ萩の盛りかな  
よらば散らなん風情なり。

聞更

雞の引き出さ萩の下枝かな  
雞なども出でよと打ち興ずる折から此頃の癖とて小雨をほふりて小庭の秋も何となくものさびたり。

蓼太

白萩や露一升到花一升

の句意にもかなへりや。兎角するうち我魂はこゝにあらで向島の百花園、龜戸の萩寺とさまよひあり

けば

蒼虬

泥水の上に亂すや萩の花  
と口ずさまれ遂には曾て遊びにし大宮の公園、榛名山上の草原など思ひつゞけられて

李由

草刈りよそれが重いか萩の露  
と吟すれば刈草高く背負ふたる翁もあどにつゞく童も共にふり向きてほゝゑむ心地ぞすなる。

芭蕉

ぬれて行く人もをかしや雨の萩  
萩原や花とよれ行く爪さがり

と誦すれば管笠打ちかたげて萩薄を押し分けく行くさまけふの雨にたぐへて目の前にありくを見

ゆるが如し。はてはまだ見ぬ玉川、宮城野まで思ひやられて。

花を重み萩に水行く野末かな

紹巴  
羅人

白萩や細谷川の浪かしら

曾良

とは何處のけしきにやあらん。はた旅中に病んで  
行きくへて倒れふすとも萩の原  
と詠じたる人の心まで思へば萩ほどやさしく哀れなるものはまたとあらざりけり。

女郎花

秋の七草は皆それくの趣あるが中に女郎花ほど淋しく哀れなるものはあらじ。されば古來歌人もい  
ろくに讀みならひ俳人も多く詠じ出せるが其たけたかく伸びすぎて淋しく花のさかりたるを見て

芭蕉

ひよろくと猶露けしや女郎花  
身の上をたゞしはれけり女郎花

涼菘

といひ其黄に咲きいでたる色をめでは  
いたづらの色を去りけり女郎花

龜世

女郎花 都はなれぬ名なりけり

士 朝

と吟せし人の心多きよ。そこらあたりの野も何となうなつかしく覺えて

井戸の名も野の名もしらず女郎花

蒼 虬

とは風雅の本意なるべく

撫でられて牛も眠るやをみなへし

百 花

とよみたらんを思へば落ちにきと戯れし法師も物かは。風のそよ吹く毎に我れさきに搖きそめし女郎

花の風静まりて後までも猶搖れ残るわびしさよ。

吹くかたへ心の多し女郎花

涼 袋

松風をかつきて臥せり女郎花

曉 臺

何事のかふりくそ女郎花

一 茶

くねるといふ名は男の喜ぶべきを

身を耻ぢよくねるとあれば女郎花

秋 色

と警めたる秋色の徳の高さは此一句にても知られたり。

わがものに手折れば淋し女郎花

蓼 太

兎角して一把になりぬ女郎花

蕪 村

折り易きものは折らるゝ世の慣ひとはいひながら折られて喜ぶ花もあるべし。わけては

原中にひとりくるゝか女郎花

秋 瓜

暮たがる花のやうすや女郎花

文 角

と夕暮の魂を見つけたる詩人の多情には花も恥ぢらひてあちらむくなるへし。

芭蕉

こゝに芭蕉といふものあり。木に似て枝なく草に似て遙かに高し。幹は大きやかなれど霜枯れにはい  
ち早く枯れて形ものうく葉は廣げれといつしか雨に破れ風に吹かれて秋の扇にさも似たり。山寺の庭  
に植ゑられて老僧坐禪の夜深くれば雨の音物すこく隠栖の書窓にそふて閑人棋を圍むの時月出で、涼  
影柀上に搖く。秋草は皆さいやかに花咲くものばかりなるに誰かは此芭蕉を取りて秋の季には入れた  
かける。むかし桃青深川の草庵に芭蕉を植ゑて其雅號となせしより以來ばせをといへば何となう尊と  
くかしこきやうに思はるゝも此草の幸なりや。されば古今の俳人多く芭蕉を詠し出だせるが中に

秋風に卷葉折らるゝ芭蕉かな

加 生

といふ句もさることながら

芭蕉葉は何になれとや秋の風

路 通

と詠したる手柄は又一きはにて路通一生の秀逸は此句にといめたりとかや。

五十

風の夕芭蕉葉提げて通りけり

保吉

とあるは

雨の日や門さげて行く燕子花

信徳

より脱化し來りたれと猶見るべき所なきに非ず。

稻妻の形は芭蕉の廣葉かな

一風

といふも奇なれども

稻妻は棕櫚や芭蕉のそよぎかな

巨海

と詠みしは平穩にして更に妙なり。さるを又

はら／＼と稻妻かゝる芭蕉かな

樗堂

といひかへたる器量をさ／＼芭蕉翁の遺響あり。

垣越しに引導のぞくばせをかな

卜枝

芭蕉葉や在家の中の淨土寺

露川

露川やト枝の糟粕を嘗めたり。蓼太更に之を翻案して

蓼太

七堂の外に大破のばせをかな

とせしは奇に過ぎて狂体に陥りたるか如し。

芭蕉葉や打ちかへし行く月の影

乙州

とは月と風との景色を言ひおほせ

雨蛙芭蕉にのりてそよぎけり

其角

とは異な處を見付けられたり。

染かねて我と引きさく芭蕉かな

蓼太

裏打のしたく成たる芭蕉かな

碩布

二句稍奇抜に過ぐれど新意を出だしたるは妙なり。

### 俳諧麓の栗の評

撫松庵兔裘なる人あり一書を著して「俳諧麓の栗」といふ。之を一讀するに終始日本古代の文法論を述べて俳諧上に應用したるなり。蓋し古より俳人古學を脩め文法を知る者少く随つて文法語意の點に於て誤謬をなす者比々皆是なり。況んや近世の俳人漫に自分免許の宗匠を以て愚者を感はす者をや。著者こゝに見る所ありて此文法論を著し今時の俳人の迷夢を破り且つ古の俳書の杜撰を罵る。卓見識ありと謂ふへし。而して文法に至りては余も無學の一人あり。故に敢て之か批評を試みず唯著者に向つ

て吾人に學問の好方便を興へられたるを謝するのみ。然れども今日の俳諧に古代の文法を其まゝ用ひよと云ふに至りては余は著者に向つて一問答を煩はさざるを得ざるなり。抑も著者か文法といふものは何の時代の文法なりや。太古か奈良か平安かはた近古か。孰れの時代にもせよ何故に其時代の文法を固守するや。文法は時代と共に變遷し得べからざるものが。是等の疑問は從來余が胸間に蟠りて解けざるものなり。著者は一心に文法を確守せらるゝが如し故に敢て教を乞はんとす。同書第二百六頁の終はりに曰く俳諧ニテハ俗ニ從フモ妨ナキガ如クナレハ故意ニ定格ヲ犯スベキニ非ルナリ云々ト是に於て著者は稍々俳諧を見ると寛なるを知る而して著者の主義愈々模糊たり。(其故意に云々と云ふに至りては余も之を賛成するなり。)又著者は俳諧芋環等を駁撃するに拘はらず却りて芭蕉越人等を庇護して此「かな」は筆者の誤なるべし此「や」は感歎の「や」には非るべしと云ふは不公平の論たるを免れず余は信ず芭蕉越人の如き譬ひ古文法を知るとも故意に之を犯したる場合あるべしと。何となれば芭蕉時代には古文法一變して「や」「かな」等の用法意義共に古の「や」「かな」に非るを以てなり。其角の

此人數舟なればこそ納涼かな

の如きは眞木柱には「納涼なれ」と書きたり。然れども余は寧ろ「納涼かな」の句を以て其角の作なるべしと思惟す。よし其角の作は兎もあれ余は此を以て彼より善しと考ふるなり。蓋し近世俳諧の習慣として「なれ」よりは「かな」の方語氣強ければなり。斯くいへばとて余は全く古文法を廢する意にもあら

ず。此の事は思考中にて自ら判決し難き處あればこゝに詳言せず。只た大方の教を俟つ。

俳諧麗の栞は二百五十頁に渡るの一冊子なれども其内百六十頁は十二品詞の説明(殊に動詞の分類)を以て塞がりたり。故に其他に就きて疑はしき數點を擧げん。第五頁に「通常ノ句体ニ於テ切字ヲ用非ルハ無形ナル風情ヲ以テ有形ナル風姿ヲ判斷センガ爲ニシテ詩ニハ之ヲ實虚ト稱ヘ無形ヲ以テ有形ヲ裁制ケリ」云々とあるが如きは説き得て甚だ容易なるが如きを覺ゆと雖余は再三再四讀み返して猶ほ其の何事なるやを解する能はず。徒に神文を讀み讀經を聴くの感あり。無形の風情とは主觀的觀念の如く有形の風姿とは客觀的萬象の如し。然れども切字なる一虚語が此主客兩觀の間に立ちて何程の功用を爲すかを怪まざるを得ざるなり。古來の歌書俳書には此の如き曖昧なる論固より多し。然れども明治の今日此種の説明を見るは奇怪至極と謂ふべし。文學は論理にて説明し盡すべき者に非ざれば全く之を論ぜざるは則ち可なり。苟も之を説明する以上は今少し論理的の明哲を要すること勿論なるべし。著者の意果して如何。又第二百二頁に

更科や月はよけれと田舎にて

のや字を玉鉾や道杯の例とするは甚だ心得ぬことなり。此やは感歎のやといふべきや否やは知らざれども俳句にては其重なる語を極めるの用を爲すなり。此句にては更科といふ語が主にして題ともいふべきものなり。芭蕉の古池の句のやもこれに同じ。越人の

行く年や親に白髪を隠しけり

のやも同じ事なり。別に變りたる意義あるに非ず。又第二百二十二頁に

鳴く鹿もさかるといへば可笑けれ

の。これを攻撃しあれどもこれは俳諧の上に用ふる一種の意義を含むものなればあながち攻むるには及ばざるべし。況んやこそその係りありて結び語なき古例さへある位なれば其係り語なくしてけれの結語ありとも左迄珍らしきことに非るべし。又第二百二十三頁より以後に新定十体なる者を論じたり。其論は皆文法に關する美辭學中の一小部分なれば余はこゝに之を講究するの勞を取らざるべし。

『俳諧麓之乘』を把りて之を讀むにはじめに厭倦を生じはては嘔吐を催さしむるものは作例として擧げたる俳句の甚だ拙劣淺陋なることなり。蓋し此書は普通の俳書の如く古句を引きて例となさず盡く今人（著者をも含む）の作を列ねたる故に予ありける。同書の凡例に曰く作例は、今少シカ思フ所アレバ故意ニ近世ノ諸名家及余ガ社友ノ佳什ニシテ法則ニ適合スルモノヲ以テ之ニ充テカリ云々。余等其何故に斯く近人の句計りを擧げたるかは知るに由なけれども思ふに古人の作例計りにては文法の變化の例として一々之れを擧ぐるに便なればなるべし。さるにても今少しは句の選ひ方もあるべきを初學の階梯とはいひながら餘りなると思はるゝなり。余は初めに此書を讀みし時は故意に今人の拙劣なるを示さんとの著者の諷刺に出でたるものならんと思ひしが凡例を再讀して佳什云々の字あり。且

つ作例中著者自身の俳句さへあるを見て始めて其選び方の眞面目なるを知りたり。余は作例中其僅に可なる者を求めしに二十餘句を得たり。若し夫れ秀逸なる者に至りては一句だも見出すと能はず。又「拾遺金玉」と題して擧げられたる諸作家の句にても過半は平句凡調のみ。然れども初學の余輩妄りに盲評を呈して大家を褒貶せんはあたらず罪つくるわざなれば一旦は思ひ止らんとせしむ人の勸めによりて次に一斑を論ずべし。之を要するに著者は文法に精しき人なるべし。而して俳諧の趣味を解し得るの人ならざるが如し。

「俳諧麓の乘」の末に「拾遺金玉」なる一節あり。蓋し方今大家の名句を拾ひ集めたるの意なるべし。されども余輩の愚見を以てすれば著にも棒にもかゝらぬと云ふべき者だに少からず。例へば

- 赤蠶のかしこまりけり神の前
- 夏の月頻りに出たうなりにけり
- 笹啼にいよく春の待たれけり
- はらわたにはろりと染みぬ桐一葉
- 春風のあちはひ知りぬ東山
- 花の山日の永いでもなかりけり
- 頭巾きた人さきたちて柳橋



うき秋も月に忘れて草枕

等の如し。其他發句といへばいふものゝ發句とも何ともつかぬ者亦少からず。

行燈もしたし夜長のふみ机

朴訥は仁者に近し毛見の衆

右二句の如き一は韓愈の詩を翻譯し一は論語の語を應用したるまでにて何の手柄もなし。

こゝろ練る窓や木の葉の障る音

黒髪の亂れはづかし朝さくら

義にはてし鬪體まつるや枯薄

南朝の御運なげくや櫓のぬし

右四句の如き月並社會の俗調に落ちずといへども亦意到りて筆到らざるものなり。

戸の透に簾かけ替へて櫓火哉

「かけ替へて」の語巧を求めて却て失す。「押しつけて」等と改めては如何。

餘の木皆手持無沙汰や花盛り

「手持無沙汰」とは尤拙劣なる擬人法にして此類の句は月並集中常に見る所なり。故に余は私に之を稱して月並流といふ。余曾て句あり

藤 九

芹 舍

大かたの枯木の中や初さくら

凡調見るに足らずといへども猶ほ或は手持無沙汰のいやみに勝るべきか阿々。

初秋のくるやまばらの松林

稍幽趣あれども惜い哉句法備らす。拙句甚だ相似たる者あり録して一察を博す。

行く秋やまばらに見ゆる竹の藪

余「拾遺金玉」を探りて秀句五首を得たり。即ち

藍 山

から草のかれく淋し薄蒲團

月花の遊びはじめや歌がるた

山畑や雲退くあとに蕎麥の花 (其角より來る)

行く秋や籠に残りし虫のすね (荷分より脱化す)

白魚とはこよなき鱧の狭物かな

或は奇警或は葦勁皆老練の筆なり。余輩後進の及ぶ所にあらず。(蟹川の句中「白魚とは」の「と」字除きたきものなり)

柳 仙

機 一

永 機

睡 子

蟹 川

發句作法指南の評

近頃其角堂機一なる宗匠あり。發句作法指南と云ふ一書を著して世に刊行す。余之を繕て一讀するに秩序錯亂して條理整然からず唯思ひ出づるがまに〜記し付けたるが如き書きぶりは猶明治以前の著書の昧裁にして今日の學理發達したる世に在りては餘り珍重すべきの書にあらずといへども此著者にして余が想像するか如く明治以前の教育をのみ受けし人ならしめば余は此書を贊美して一讀の價値を有するものなりといふを憚らざるなり。蓋し今日の如く腐敗し盡せる俳諧者流の中より此一入現れ出で、同學者の汚點と淺識とを指摘したるの勇氣と見識とは局外者の萬言を呶々するに勝りて愉快なるを覺ゆるなり然れども之を讀んで猶不満足を感ずるの箇處多きは勿論の事にて之を詳評するに勝へずといへども一讀の際思ひあたりしとのみを擧げて著者の教を乞はんと欲するなり。

此書の始に俳諧の起原を説く中に「連歌は詞を和歌に取れる故(略)只中等以上の社會にのみ行はれしを我正風の祖師芭蕉翁大にこゝに慨歎する所ありて」云々と云ふは順序を轉倒せるものにて連歌を俳諧に變したるは芭蕉にあらずして貞徳にあること勿論なり。されど後段に猶芭蕉の意向を述べて「今の俳諧の如きは作意になれる者のみなれば自然の妙は絶て無き者なり」と云ひたるは確論にして且つこれによつて觀れば前段の誤謬は著者の誤解にあらずして敘述の粗漏に出つると明らかし。又著者は稍「俳諧は滑稽なり」と云ふ釋義に拘泥して故らに嚴謹に傾きたる俳句を引用して例となし且つ其主旨を演譯して「蕉翁が晋子を賞せられしも此道の第一義と立たる滑稽の他に拔でたる故ならん」と云ふに

至りては其論甚た妙なるが如しといへども終に我田へ水を引くの誤りを免かれず。其角の滑稽に妙を得たるは眞實にして著者の言當れり。唯滑稽を以て發句の本意とするに至りては其説甚た誤れりといふべし。然れども著者の滑稽の意義を解すること太た曖昧にして時として意を異にするなきかの疑を存せざるを得ざるなり。

發句作法指南に、發句の調格と題して、其中に「發句は纔に十七字なれば(略)和歌の如くひたすら優美なる姿を述る能はざる者あり故に和歌よりは一層區域を弘めて俗言平語を交へ嫌ふなきなり。かれは姿は第二義として感を第一義とす。さればとて優美を嫌ふ者と思ふべからず」云々とあるが如きは至當の論なり。然れども姿の亂れたる例として。

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

芭蕉

ひなのさま宮腹とにまし〜ける

其角

柳散り清水かれ石どころ〜

蕪村

といふ字餘りの三句を擧げたるは未だ以て讀者の心を飽かしむるに足らず。何となれば姿即ち句調の弊惡は必ずしも字數のみに關せざるなり。若し句調は字數の上のみにありとせば三十一文字に限りたる和歌の上に姿を論ずるの必要も無く隨つて定家卿杯が姿に就きて喋々と言葉を費さるゝ事も無き筈なり。和歌既に然りとせば發句亦これなくして可ならんや。例へば

川中の根本によろこぶ涼み哉  
といふ句を試みに

よろこんで涼むや川に出る根本

といひかへんか。其心は同じ事なれども其の格調に至りては天壤の差あること勿論なるべし。又

黙禮にこまる涼みや石の上 正 秀

といふ句を

石の上もく禮こまる涼み哉

と改めなば如何。僅かに言語の位置を顛倒せしに過ぎざれども猶其句調は原作に劣るを見るべし。近時の書生にして俳諧を學ぶ者皆意到りて筆隨はさるの憾あり。蓋し其思想は豊富なれども未だ格調に於て到らざるものあるによらざるを得んや。

「發句作法指南」の中に「發句に雅調と俗調の別あり」と題して其中に「卑俗とは詞の上をいふにはあらず心の卑俗なるをいふ、(略)其の卑俗の調といふは縦合は

家内皆まめでめでたし歳の暮

といへる類是れなり、此句の如きは詞の上卑しといふへき處は露ばかりもなければ其心は無下に淺ましき俗調なり、此句を或人が

何事もなきを實そ歳の暮

と直したるは雅致淺からず、姿もいと高し」云々とあり。余は一讀して稍怪しむ所あり。乃ち再三之を讀む。而して終に其意を得ず。初めに心の卑俗といへるは善し。然れども家内云々の句を何事も云と改めて其心に幾何の差異ありや。余は兩句を比して其心は全く同じく只其姿變せりといはんとするなり。又其姿は孰れが可なりといふに著者は「姿もいと高し」と判斷して後句を譽めたれども余は後句に比して寧ろ前句の眞率なるを取る者なり。(尤其句の凡俗なるはいふまでも無し) 此の如き甚だしき過誤は後生を誤ること多からんに注意ありたき者なり。又同書に「發句の沿革」と題して「發句の世に行はるゝ事、凡そ二百餘年、其間を大別して三となさんに守武宗鑑より貞徳季吟に及ぶ之を其一とす、」云々と説き出したり。然るに守武宗鑑は今を去る事大略三百五十年位前の人なれば二百餘年とは痛く違ひたり。又時代を三に分つとありて第一のみを挙げ第二第三の區別無きは不審なることなれど大方は活字の誤植か校正の粗漏によりしなるべし。さはいへ數字の誤謬程害の多き者あらざれば著作編輯に従事する人は尤謹まざる可らず。又同書に發句の切字并にてにををはを論して「此發句の切字といふは一種格別に設けたるものにて歌と同様に論すへき者に非ず」と云ひしは卓見なれども「てにををはと唱ふる者は自ら其詞に備りてある故、真心のまゝに云ひ出れば知らずく自ら叶ふ者なり」といひ「變格といふ者を設け分らぬ者は皆此部にあて入れるなど笑止の限りなり、(略)格に變あらは格に

あらず」といふが如き餘り文法を輕蔑したる言ひ方にして余は其の一理あるに拘はらず之れを評して

「俳諧麓乘」と共に兩極端に走る者なりと云はんとす。

「發句作法指南」の中に「發句の感あると感なき」と題を掲げて白全といふ人

と作りしをある人一讀して扱もあぶなき句を詠まれたりといへば白全忽ち悟りて

背向てあぶながらるゝ楮火哉

と改めたるを記載しそれにて一座の秀吟となりし由を言ひたり。然れども余が見る所を以てすれば後句稍曲折を求めて却て卑俗に陥り一の妙味なし。寧ろ前句の淡泊無味なるこそ面白かるべけれど思ふなり。

同書に「蕉翁の六感」と題して其角、嵐雪、去來、丈草、支考、野坡の六門弟の句を芭蕉の感賞せしよし記し且つ其句を掲げたり。こは誰が言ひ傳へしことか知らねども蕉翁の感賞せりと云ふは誤謬なるべし其證は去來の部に「實なること去來に及はず」と書きて

應々といへど叩くや雪の門 去來

といふ句を載せたり。然るに去來の此名什は蕉翁歿後の作なる事去來抄に詳なれば爰に去來抄の一部を抄出して示さん。同書に曰く

丈草曰此句(去來が雪の門の句なり)不易にして流行のたい中を得たり。支考曰いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰たい先師の聞給はざるを恨るのみ。曲翠曰句の善惡をいはず當時作せん人を覺えずといへり。其角曰眞の雪の門也。許六曰尤佳句也。いまだ十分ならず。露川曰五文字妙也。去來曰人々の評亦おのゝ其位より出づ。此句は先師遷化の冬の句なり。其頃同門の人難しと思へり。今は自他ともに此場にとまらず。

これを讀めば芭蕉の此句を聞くに及ばざること明けし。又右六感の中に支考の句として

蚊屋を出て又障子あり夏の月

を擧げたり。されど此句は風俗文選に載せたる「贈新道心辭」といふ文の終りに附けたる句なれば丈草の作なること論を俟たず。恐らくは著者誤りて丈草と支考とを入れ違へたるものには非るか。

「發句作法指南」の中に「家人擧て風雅」といへる一項ありて「世に俳句を好む人多しされども夫之を好むも妻はさる心なきあり父之を好むも子其道を知らぬあり」云々ことごとくしく説き出しながら其例として僅かに曲翠一家のみ擧げたるはいと飽き足らぬ心地すれば今余が知れるまゝに之を補はんと欲すれども盡く列擧せんは餘りくだしくしければ其有名ならぬ者と且つ疑はしき者とを闕きてありふれたる者のみを擧げんとす。先づ其父子共に俳句を嗜む者は左の如し。

紹 巴……………  
仲 仍 倫 智 月 尼……………  
州 川 來 乙……………  
六十三

昌 琢………昌 程  
 蟬 吟………探 丸  
 季 吟………正湖立 春  
 未 得………未 琢  
 東 順………其 角  
 風 虎………露 霧  
 風 麥………梢 風 尼  
 堤 亭………苔 翁  
 荆 口………文千此巴川 筋 靜  
 千 那………角 上

又其父子共に相聞こゆるに非るも兄弟共に俳家たるもの少からず。即ち

望 一………正 友  
 玄 陳………心 前  
 望 一………正 友  
 望 一………正 友  
 望 一………正 友  
 望 一………正 友  
 望 一………正 友  
 望 一………正 友

等の如し。又叔姪共に之を嗜むものは

正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠  
 正 秀………曲 翠

等あり。又夫も妻も之を嗜むもの多きが中に

嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻  
 嵐 雪………妻

加 生………と め  
 加 生………と め  
 加 生………と め  
 加 生………と め  
 加 生………と め  
 加 生………と め  
 加 生………と め

光 貞………み  
 光 貞………み  
 光 貞………み  
 光 貞………み  
 光 貞………み  
 光 貞………み  
 光 貞………み

等尤有名なり。又一家數人を出だすものには

去弟魯妹千  
 來………姪風 國  
 町 子  
 永 參 女………子知  
 足 蝶 子 羽 羽………女春  
 つ 女 蝶 羽 妻 ね

の如きあり。此外家奴にして俳諧に入る者、其角の奴に是吉あり。仙化の奴に吼雲あり。尙白の奴に與三あり。蓋し父子夫妻叔姪主従にして共に之を好む者は一は其遺傳により一は其薰陶に出でずんば非ざるなり。

「發句作法指南」の中に「延寶前にも名吟なきにあらず」といふ一項ありて著者の名句と認めたる俳句を擧げて之を評論したり。然れども此中の過半は延寶以後の作ならんと思はるゝなり。今手許に参考書無きを以て一々之を證明する能はずと雖ども是等の句は歴史的に考ふるに決して貞享以前に於て此の如く多くある可らざるなり。蓋し貞享の頃芭蕉の一派を開きしより後は天下之が爲に風靡し假令他門の俳家といへども多少蕉風の餘響を受けぬものは之れ無きに至れり。故に貞享以後には蕉門以外にも名句多けれども延寶以前に於ては此種の句決して此の如く多からざるなり。且つ又此項中に却りて

元日や神代の事も思はるゝ

守 武

元日の見るものにせん不二の山

宗 鑑

草も木もめでたさうなりけさの春

貞 徳

いさよのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥

貞 室

これはくどばかり花の芳野山

同

等の如き延寶以前の名句を擧げざるは餘りありふれたりとてわざとせし事にや如何。又

ねふらせて養ひ立てよ花の雨

貞 徳

と云ふ句を評して「此句は子を設けたる人にと端書あり、此ねふらせてといふ一句家に嬰兒を養育する情を盡せり、(略)夫れ嬰兒は乳汁の養ひ足れば眠る、若しいさゝかにも不足すれば眠り得ぬのみにもあらず種々の疾病是れより起り、よし幸に死せずとも生涯多病の者となる、此句は之を思ひて、春時花を催す雨を乳に比していへる凡骨にあらざるなり」と長々しくいはれたり。されども余の考にては是れ大なる誤解なりと思はる。評者は「ねふらせて」を「眠らせて」と解し「雨」を「乳」に比したるが如く見ゆれども余は「ねふらせて」は「舐らせて」と解し「雨」は「鮎」にかけたるものと思ふなり。即ち鮎をねふらせて養ひたてよといふ事を花の雨に取り合はせたるものなるべし。總て貞徳時代の俳句は發音の同じきものにたよりて他の語をかけるが通例の詠み方にして唯其物に類似の點ありて雨を乳に

比するが如き事は餘り見當らぬなり。俳句に限らず總て詩歌文章を解するには其作者、其特性、其時代の風調とを知らざれば大なる誤謬を來たすは常のとなり。「發句作法指南」に芭蕉句解を作りて

行く春や鳥啼き魚の目は涙

芭 蕉

鯉汁や鯛もあるのに無分別

同

七月や六日も常の夜には似す

同

あかくと日はつれなくて秋の風

同

の數句をも名吟の如く評し殊に秋風の句を取りて劇賞せしが如きは其意を得ざるなり。芭蕉如何に大俳家たりしども其俳句皆金科玉條ならんや。又

青くてもあるべきものを唐辛子

芭 蕉

といふ句を解して「唐辛子は青くても辛き者なれば青くてもあるべきに、さも辛さうに燃たつ如く赤くなる事よと飽まで辛きまなるを言ひ顯したる處」云々とあれどもこは全く反對に誤解したるものにはあらざるか。愚考によれば此句の意は「唐辛子は固より辛き者なればせめて青きまゝにあらば目にも立たずしてよかるべきになまじひに赤くなるが故に人の目にも立つなり。目に立つ程うつくしければ甘くもあらんかと思へばさはなくて甚だ辛き者なる故に其赤き色に染まるだけが憎らし」となる

べし。若し單に辛き形容とのみせんには「あるべき者を」の廻し方ゆるやかに聞こえて面白からざる様に覺ゆ。

又同書其角傳の終りに

同(寶永)四年二月青流病を草庵に訪ふ

春暖閑爐に坐の吟とて

鶯の曉さむしきりくす

此句解し難きよし世上には云へと去來並に支考の評に云々

とあれども去來は既に寶永元年に死したれば此の寶永四年の句を評すべきよしなし。こは何かの間違ひなるべし。

又同書の「或俳書にてにをばをいへる」と題せる一項は九頁の長きに渡りながら其の解説甚はだ必要ならず。

「陣中へは便りも無用どかたく云ひつけ置たるに」(略)これもてにはをのけて「陣中たより無用かた

く云ひつけ置たる」(略)かくして聞ゆへきか(略)といふが如き解釋にも及ばざる事をいくつともなく例を引きて無用の辯を費したる實に見識に類するものにして餘りといへば餘りと云ふべし。

又同書に諸家の略傳を叙し又は略評を下す處多くは俳家奇人談の文章を取りて處々助辭接續辭杯を僅かに書き替へたり。古書を其儘採り用ふること既に見識なきが如くなれども其文を全く引用してこれは何の書によれりと明言し置かば固より何の罪も無き事なるに其文章の大方は採用しながら處々の言語を書き替へたるが如きは古文を剽竊して已れの文と偽り稱するの嫌疑を免れず著者の意必ず此の如くならざるべけれど少くとも其不注意の罪は之を負はざるべからざるなり。猶此外多少の瑕瑾多かれども一々之を指摘するも煩はしければ其評論は止めつ。

明治廿六年五月二十日印刷  
明治廿六年五月廿一日出版

兼著作  
發行者

愛媛縣士族

正岡常規

東京下谷區上根岸町  
八十八番地寄留

印刷者

秋田縣平民

佐々木正綱

東京神田區雉子町  
三十二番地

印刷所

日本新聞社

東京神田區雉子町  
三十二番地